岡崎市明大寺町の葵丘で開かれた建築座談会

本社主催

建築座談会

豊かな心を育む原風景

東海愛知新聞社はこのほど、岡崎市明大寺町の葵丘で「建築座談会」を開いた。市内外の建築家七人が参加。全国的に均一的な街づくりが進む中、地域の自然や風土に合った建築とは何か、子どもたちが大人になっても記憶に残る街づくりとは何か―など「建築文化」について話し合ってもらった。座談会に先立ち、籠田町でこのほど新築された「竹内文具店」を視察した。聞き手はNPO法人アースワーカーエナジー理事長で小原木材社長の小原淳さん。

―建築文化とは何か。

小原　NPOが平成二十年にスタートした天使の森プロジェクトでは奥山を再生する活動をしています。一方で消費をしている街ではどうあるべきかなということで、建築家との勉強会を三年間で三十六回行ってきました。今回は、そこで講師をしていただいた方々を中心に集まっていただき、どういう考えで建築設計をされているか伺いたいと思っています。

まずは、個々に持っていらっしゃる建築文化論からお願いします。

横山　建築文化というのは、自然と人間と建築の関係。建築は人工的なもの、その対極に自然がある。この二つを人間の生の営みを介してどう関係付けるかが、まさに建築文化だと僕は思う。自然と人間と建築が連環していること、つながっていることが建築文化という思いがしている。建築の歴史、都市や人類の歴史をやっていくと、自然との関係で語られている。自然との対峙・適応の辺りから生まれたものを建築を通して捉え直すことだと思う。

向井　横山さんに同感です。建築文化がきちんとしているかどうかは、それが保たれるような形で設計者が意識してその場を作っているかが重要かな。

岡崎の街で自然の豊かな場所は乙川にあって、人が長く住んで出てくる生活感を感じる街並を探さないとなくなってきているのは、それを基調としたものを考え直さなければならないところに来ていると思います。

最近は建築をいかに自然に融合させるかをテーマにしていて、その辺が建築文化の大事なところじゃないかと思います。

学びを通じて新たな創造を

藤尾　自然との調和ということですが、エンジニアの視点からは外力と言って風の強い地域では風荷重、地震の多い地域では地震荷重といった力があり、その場所で得られる材料でそれに耐えられる空間を作ることが重要になってきて、古くはそれぞれの地域で建物の形はある程度秩序があるような建ち方をしていたと思います。

それが産業革命以降、鉄骨やコンクリートの建物が大量につくられるようになり、それを設計する手法や解析技術も発展してきました。どこにいてもそれで建てられることを良しとしてきたように思います。

そうした、本当はその場所に適していない形でもテクノロジーで解決するようなやり方が一方にありながら、その街が持っていた文化みたいものからヒントを得て、それを新しく近代的に解釈すると、もともとあった文化に馴染みの良い空間を作れるという考え方が一方にあります。

矢田　今回、竹内文具店の建築四十年の建物をリノベーションさせていただいて良かったと思う。創業八十五年で、効率を考えれば郊外に土地を買った方が岡崎では商売としては成立しやすい。それでも、創業の地で多少不便があっても、老舗が継続して古い建物をしたたかに使っていくことはすごいことと思っている。街でも会社でも継続していることが大切だと思う。竹内さんは八十五年間すごいエネルギーを注いできていて、そういうことが街づくりにもつながると思う。

それと「人」。今回、竹内さんが再度かなりのお金をかけてお店をリニューアルしたのはシャッターを閉めている他の商店主に対してもう一回商売を始めてほしいという思いがあってそう決められた。そこが竹内さんの人としての魅力で、建物が人をどう育てていけるかによって継続していける力になれると思った。僕らがこういうことができるから街づくりにつながるということではなく、人や市民の力になれるかが重要かなと思った。

栗原　ここまでの議論とは少し違ってしまうかもしれませんが、最近設計のときに考えていることは、「まちに開く」ということです。これは三つに分かれていて、まず所有境界を開くということ。設計範囲は決まっているのですが、それを開く。光や影、景観などは環境的に連続していて、相互作用の中で街ができているので、お互いにメリットになる関係をつくっていく。

次にコミュニティに開く。フェンスを立てたいという考えは普通だけど、不安要素を助長していくとゲーティッドコミュニティのようになってしまう。もうちょっとコミュニティに接続するような空間にしていくことが必要ではないか。

そして時間に開く。設計は今だけ良ければ良いという問題ではない。子どものこととか、現時点に特化した設計はちょっとあやしい。もっと流動的というか、生活の仕方に自由さをもった設計が必要ではないか。

また、「歴史に接続する」ということが重要と思います。その一つ目は小さい歴史で、そこにどんな植物が生えているか、周囲に何が建っているかというように、敷地環境にはその場の小さい歴史があります。それは環境のリノベーションとして個々の建築を設計することにつながる重要な意識につながっている。自分の建築だけではなく周辺を含めて新しいものをつくることで具体的にどんな関係をつくろうとしているのかということです。

今度は大きい歴史で、大きい範囲で考えると何百年という歴史があって、その中で自分がどういう位置にいて、先人がやってきたものとどう接続しなきゃいけないか。百年後の世代に間違った建築のつくり方だったと判断されるのは困るわけで、長い歴史の中の一点として考える方がいいと思っています。

これらとは関係なく地域性というのがあると思う。例えば東京と愛知の違いはどこにあるのかと考えると、住宅用敷地の大きさが挙げられます。二十三区内ではなかなか庭を設計する余裕が無い場合が多いと思いますが愛知はそうではありません。狭い敷地だと思っても家と駐車場を取りながらも、がんばれば庭が必ず計画できます。外部を設計して、庭を設けて光や通風を取り入れて、かつ、それを生活でどううまく使うか、そしてさらに、景観や光や風といった点で周辺の人にもメリットを与えられる外部であってほしいと思う。

岩月　昔の歴史も文化だけれど、今から時間を重ねるということで文化をつくっていくと言えると思う。私たちはどんな文化をつくっていったらいいのか。日本の風土や人の継承という歴史的に大切な部分を残しながら、新しくどうしたらいいのかということがある。

竹内文具店は街が活性化しているという意味で「生きている建築」と言えるのではないか。生きている建築が増えれば増えるほど街が豊かになる。私たちは生きている建築を目指してつくっていかないといけない。

でもそれは建築家だけではできない。住んでいる方や生活もある。人が仕事などで街を行き来するような街づくりに関わっていきたいなと思う。そのつながりで記憶に残る街をつくっていって、それがいい文化になっていったらいいなと思う。

生田　栗原さんから愛知でどんな特徴かという質問の話が出ましたが、愛知という括りでは大き過ぎて捉えづらい。街の文化を感じるのは個人的な体験に基づいて感じていて、そういう原風景を持っていると思います。

私は埼玉のベッドタウンで育って原風景をなかなか持てないですが、人それぞれの持ち方があって、原風景をいかにキープしていけるか、想像を膨らまして建築家がその一つ一つを考えていくことが重要だと思います。子どもがどういう原風景を持っていけるのか、それにどう寄与できるかを想像することが街を考えるときに重要な視点だと思います。

岡崎の場合は幾重にも原風景の重なりが豊かにあって、家康の時代からつい最近の歴史まで、原風景の層として豊かな場所で何かが起きそうだなと感じています。それがいかに視覚化されたり意識化されるかというような街のつくり方や建築の寄与の仕方が、街をつくるという視点では重要だと思います。

ここからは、それとは別の視点の話をしたいと思います。

一般的にヨーロッパは建築を使い続けていく文化がありアイデアをたくさん持っていて、そういったことを日本の建築家も学習していかないといけないし、ユーザーもそういうアイデアを育てていく時期に入っていると思う。

今、研究者として名古屋市の家庭保育室を研究していて、新たな再利用の方法を開発することでその街がいきいきしてくるのを感じています。

既存建築物を活用するために、プログラムという知恵を育てていく時期に来ているのではないかなと思う。

個人の思いが〝街の文化〟に

小原　建てることを前提に、こういう生活をしたいという話は分かりやすいと思いますが、逆説的に文化を軸にしたときにカタチはあると思いますか？

向井　大学で非常勤をやっていて、いろんな学生が出てくる。学生の才能をどうやって伸ばすかを考えながらやっていて、私の方向性としてはカタチから入る人は苦手なんですよ。なぜかというと、私は人が中心だと思っているから。いかに人が生活したり、仕事をしたりということが育まれるかがポイントだと思っています。

ですから、私自身は建築のカタチが消えていく方向でやっています。街並や自然の風景にいかになじむか、建築家として街の秩序を読み解く感性をいかに出せるかだと思います。

カタチにするのは建築家の仕事ですが、設計の目標としているのは「ひとが生き生きと居心地良く生活できるか、ふれあえるか」で、人の生活感をどういうふうに作れるかが建築の原点だと思います。

横山　モダニズムの精神は、形態は機能に従うということ。それで、失われてしまったものは何かと考えると、人間性や情感みたいなものがスパッと切られてしまった嫌いがある。機能主義の精神はもう少しきちっとしたものが押さえられた上での概念で、カタチありきではないということが優先されるべきと思う。

ところで、世の中の状況が良い方向にいっていない。我々職能人が建築の社会性みたいなものを一般のクライアントに訴えていく必要がある。昔は「住宅を買う」とは言わなかった。それは住宅が商品になってしまったことを意味する。その辺の意識を我々が変えていかないといけない。それが正しい方向ではないと訴え続けていかないと、景観や街並み、環境は良くなっていかないと思う。そういった現状について、例えば商品化の流れについてどう思うか。

藤尾　一つの要因は共通の価値観で縛られない、いろんな考え方があってもそれを許容する文化があると思います。それが様々な考え方のものを取り入れてモノを作る上でメリットになり、日本人は工業製品など加工貿易で成功しました。それで工業的に作られたものは優れたものと考えがちになっています。

家が欲しいと思っている人が求めているのは、耐震性能や断熱性能といった性能もあるけれど、それが全てではないということに気づいてません。

例えば竹内さんは「地震で壊れると怖いので強くして欲しい」というのが最初の要望でした。そこから、矢田さんが文房具店としての展望といったものを提案し、出来上がってみるとそれが見えて来たと思います。最初に依頼する時点で表に出てきていない要望に気づいていない可能性があるのです。

講演会やコラムなどを目に触れる機会が多くなってくれば、家を建てることがどういうことなのか、また、自分の内面にあった欲求が見えて来て、建築家に依頼する意味が分かってくるのではないでしょうか。

矢田　僕は岡崎出身で高校の頃の同級生は自動車関連のところに勤めている人が多くて、会って話をすると「売れる物がイイものだ」という言い方をする。その辺が、横山さんが言われることにつながるような気がする。西三河の特性として価値観もそういった感じで「大量に作って大量に売る」というのが何かを考える根幹になっていると思う。

モダニズムというか、ユニバーサルに誰でも使えて安全なことは大切だけれど、栗原さんが言った「些細な差異」「違うということ」を示していくことが大切。使い続けるアイデアを出すのは建築家ができることで、積極的に提案することもこれからの仕事として重要になってくると思う。

栗原　藤尾さんの話や車の話を聞いていて、家が車と同じように製品になって性能で評価されるのをなるほどと思った。自分は友人に「日本人はデザインが得意じゃないじゃん。日本人の性質、気質で文化的に残ってきたのは、誠実に機能面やコスト面を収めていく技術じゃないか。文化デザイン的に勝てると思わない」と普通に言われたことがある。そういうことが、意識として日本人の中に出てきているのかなと思う。

私としてはお客様と、「この場所で一番住みいいのはこうではないか」と説明しながら、どう思うかというところをキャッチボールしていけば、人や環境についてコミュニケーションがなかったらこういうものになっていなかっただろうという建築が出来上がっていくと思う。建築家はそこに価値を見出してやっているけど、お客様はなかなかそういうことを知らない。

話が変わりますが、建築雑誌を読んでいると日本の住宅産業が世界の中で珍しいくらい発展してきている。建築家が設計したものの割合が他の国よりも多い。それは三十年四十年で壊してしまう住宅システムがあるから。

自分は学生のころからスクラップ&ビルドはいけないと思ってきたが、それを止めたら日本の建築文化は一気に衰退すると思う。

少しずつでも更新をしつつも環境や歴史に配慮した建築ができれば、世界に例のない都市構造ができていくのではないか。

岩月　分譲住宅を買うという方向性を変えていけるとすれば、その街に帰って来たくなるような街になること。その街のこの場所でこういう家を造りたくなるような街になっていけば買わなくなる。街の構造が変われば減っていくと思う。

昔は車が排除され、人が通っている道が、商店の野菜や本が漏れ出てくるような場所になっていた。今は車を優先して人が楽しく活動できないような感じで、人を排除している。

確かに機能的で便利というところがあるけれど、もっと街歩きが楽しい街が広がれば、ここにこういう家を建てたいという人が増えると思う。

それが、日本は上手じゃない。海外は上手で仕組みとかきっかけを考えていて、生きている建築ができていて、人も楽しそうに暮らして、モチベーション高く生きていける。

どうしたらそうした街がもっとできてくるかを考えていくことが重要だと思います。

生田　今、岩月さんが言われたことをなるほどなと思って聞いていました。

その町の特性を愛して、そこに住みたい人こういう家を建てたいと思うことは、画一した家から脱却する一つの手段だと思います。

その場所に住みたいというように、場所を意識化できる街そのものをつくっていくことが、そうした文化を育てていく上で重要だという話になるほどと思いました。

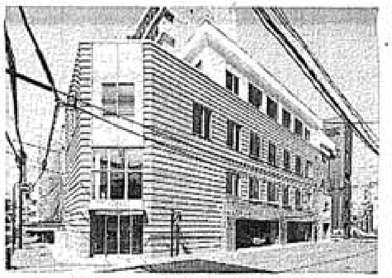
小原　全国で年間八十万戸の新築のうち、建築家が携わっているのは1%という話がありましたが、いきいきと生きていきたいという市民の人たちが今日の話をきけば1%が2%3%になっていくのではないかと思いました。そうした一人ひとりのチャンスを作っていきたいと感じました。今日はありがとうございました。

竹内さちよさんのお話
（竹内文具店GM）

当初、旧店舗の建物を利用してリニューアルを考えていましたが、築年が古くて建物の傷みも大きかったので店舗とは別に貸事務所にしていた建物を使うことにしました。もちろん今のご時世で考えれば郊外で店を構えた方が駐車場も確保しやすく商売もしやすいと思います。でも、お店のリニューアルの計画を矢田先生と進めていく中で、竹内文具店の建物が康生の街の景観として街の人たちから愛されていたことも分かり、60年来操業してきた町で店を続けたいと思いました。

竹内文具店では10年ほど前から万年筆に力を入れています。手書き文字の良さを広めていきたくて、岡崎が手書き文字がいっぱいあふれている町になるといいなぁと思っています。お店の外と内の仕上げは左官仕上げで、職人さんの手仕事がそうしたお店の考えとよく合っていると感じています。

この場所は、道路を挟んで大正に建てられた岡崎信用金庫資料館があって、落ち着いたいい雰囲気の通りだと思います。新しいお店が再びまちの景観として皆さんに愛着を持ってもらえるように、スタッフ一同、原点に返って頑張って、ほんの少しずつでいいから長いスパンで前進していきたいと思っています。



所在地：岡崎市籠田町36

竹内文具店を見学

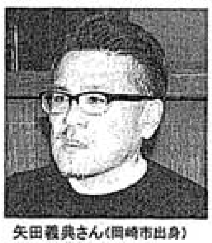
―参加者紹介―

生田京子さん（東京都出身）
名城大学理工学部建築学科准教授

岩月美穂さん（岡崎市出身）
studio velocity 一級建築士事務所代表代行

栗原健太郎さん（埼玉県出身）
studio velocity 一級建築士事務所代表

向井一規さん（岐阜県出身）
向井一規建築設計工房代表



矢田義典さん（岡崎市出身）
矢田義典設計室代表

横山正登さん（岡崎市出身）
アドバース設計主宰

藤尾篤さん（名古屋市出身）
藤尾建築構造設計事務所代表